台大日本語文研究第 51 期
2026 年 06 月，頁 1-32
2026-03-20 收稿，2026-05-30 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.202606_(51).0001

山崎豐子『不毛地帶』論
—於引用、改編與創作之間—

德永光展*

摘要

本稿以『不毛地帶』為研究對象，闡明該作品成功營造出彷彿重現現實般的臨場感，進而激發包含多數戰爭體驗者在內的讀者之事實。若留意作品中虛構的人物或團體存在特定原型之情形的同時，嘗試與事實進行對照的話，便可發現伴隨名為自衛隊的戰鬥機採購案，在政商界有收受金錢及洩漏機密之情事，存在著沉溺於利權的人物與團體之事實。書中提及讓人聯想到洛克希德（Lockheed）的拉克希德（Luckheed），格魯曼（Grumman）的格蘭特（Grant）等公司名稱，當接觸到這些公司與日本政界，商社圍繞利權展開激烈鬥爭的情景時，即便讀者產生了作者預言洛克希德事件或道格拉斯・格魯曼事件的錯覺也不足為奇。因此，透過批判性閱讀山崎豐子，被視為壹岐正原型的瀨島龍三，以及政治家們的言論，在確認實際發生事件的內幕浮現之過程的同時，針對山崎在 FX 商戰中所洞察到的狀況，一邊提及『不毛地帶』與「國會眾議院決算委員會議錄」等相關資料一邊進行考察。在此基礎上，進一步論及山崎如何揭露現實，並將其混入創作中的同時，創造出充滿臨場感之作品的歷程。

關鍵詞：山崎豐子、『不毛地帶』、瀨島龍三、第二次防衛力整備計畫、巡邏機採購

* 福岡工業大學教養力育成中心主任兼教授

臺灣大學學術期刊資料庫

A Study of “The Barren Zone” by Yamasaki Toyoko: Between Quotation, Modification, and Creation

TOKUNAGA Mitsuhiro*

Abstract

This paper examines “The Barren Zone,” shedding light on how the author’s creation of a work, exuding such a sense of realism, as if recreating reality, resonated deeply with readers, many of whom were war survivors. By examining the fictional characters and organizations in the novel, and recognizing the real-world analogs they are based on, we can see that when the Japan Self-Defense Forces placed orders for fighter jets, the bribes that were made, the confidential information leaked in political and business circles, and the decisions made by individuals and organizations, tainted by vested interests, accurately represented reality. Yamasaki included fictional companies, like Luckheed and Grant, which are reminiscent of real-world companies Lockheed and Grumman, and, observing the fierce battles they waged with Japanese politicians and trading companies, it is easy to fall into the illusion that the author foresaw the Lockheed and Douglas-Grumman scandals. By critically reading the discourse around Sejima Ryuzo, who is thought to be the model for main character Iki Tadashi in Yamasaki's novel, along with statements from politicians, we can see the dark side of the actual events that took place. Next, Yamasaki’s prediction of the FX market will be examined, referring to related materials such as “The Barren Zone” and "Diet House of Representatives Budget Committee Minutes." Subsequently, the discussion progresses to how Yamasaki exposed reality,

* Director and Professor, Center for Liberal Arts, Fukuoka Institute of Technology

臺灣大學學術期刊資料庫

intertwined it with fiction, and ultimately wrote a novel brimming with vivid realism.

Key words: Yamasaki Toyoko, “The Barren Zone,” Sejima Ryuzo, Second Defense Capability Development Plan, Patrol Aircraft Order

臺灣大學學術期刊資料庫

山崎豊子『不毛地帯』論
—引用・改変と創作の間で—

徳永光展*

要旨

本稿では『不毛地帯』を取り上げ、現実を再現するかのような臨場感を醸し出す作品生成に成功したことが戦争体験者を多数含んだ読者を刺激した事実を明らかにする。作品内で架空化されている人物や団体に特定のモデルが存在していた様子に配慮しながら、事実との照合を試みれば、自衛隊の戦闘機受注に際し、政財界で金銭拝受や機密漏洩が行われ、利権に塗れる人物や団体が存在していた事実が分かってくる。ロッキードを彷彿させるラッキード、グラマンを彷彿させるグラントなる会社名が書き込まれ、それらと日本の政界や商社が利権を巡って激闘する様子に接すると、作者がロッキード事件やダグラス・グラマン事件を予見していたような錯覚に陥っても不思議ではない。そこで、山崎豊子、壹岐正のモデルとみられる瀬島龍三、政治家らの言説を批判的に読むことで、実際に発生した事件の裏面が浮上してくる様子を確認しながら、山崎が FX 商戦で見通した状況につき、『不毛地帯』と「国会衆議院決算委員会議録」をはじめとする関連資料に言及しつつ考察した。その上で、山崎が現実を暴き出し、そこに創作をない交ぜにしながら、臨場感あふれる作品生成に至った様子へと言及を進めた。

キーワード：山崎豊子、『不毛地帯』、瀬島龍三、第二次防衛力整備計画、哨戒機受注

* 福岡工業大学教養力育成センター長・教授

臺灣大學學術期刊資料庫

山崎豊子『不毛地帯』論
—引用・改変と創作の間で—

徳永光展

一、はじめに

山崎豊子の『不毛地帯』は 1973 年 8 月 12 日号から 1978 年 8 月 27 日号まで「サンデー毎日」に 237 回にわたって連載された。山崎の作品としては最も長編になったこの物語を主人公・壹岐正の立場からみると、①第二次世界大戦の敗戦後に 11 年間のシベリア抑留生活を送る場面、②近畿商事嘱託時代に再軍備に向かう日本の哨戒機購入を巡る商戦へと突入する場面、③繊維会社から出発した近畿商事を総合商社へと発展させる場面、④経営破綻状態の千代田自動車をアメリカの自動車会社と合併させるべく奮闘する場面、⑤ニューヨーク支店長となって米国勤務をする場面、⑥イランにおける石油獲得のために命懸けで取り組む場面、に大別できる[1]。そこでは、同時代に社会で発生した事件を彷彿させる出来事が描かれ、実在のモデルをうかがわせる記述も観察される。それらの異同を跡付けていくと作品が現実を解説したり、近未来の事件を予言したりしているようにも映る。

本稿では、元大本営参謀だった壹岐正が「ハバロフスク、タイシェト、マガダンの北のラゾなどを転々とし」(12-18)、シベリア抑留の辛酸を舐めた体験が綴られた後、戦後の日本を生きるために入社した近畿商事で自衛隊の哨戒機受注に関与していく過程を追いながら、これまで作品論としては取り上げられてこなかった 1958 年に発表された日本の第二次防衛力整備計画（二次防）にまつわる言説が解説に創作を取り交ぜた形で生成されている状況（②の場面、「十二章　春雷」から「十六章　怪鳥」まで）について主に考察する。

[1] 前川文夫『山崎豊子への誘い』白地社、2005 年 5 月、126-128 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

戦後 80 年を経た今、国防という問題を取り上げた『不毛地帯』における自衛隊の軍事力増強問題の描写は重要性を増したトピックであり、政界のかじ取りが軍事とは不可分である点からも、学ぶべき示唆に富んでいると判断するものである。

二次防発表時の首相は岸信介（在位：1957 年 2 月 25 日～1960 年 6 月 23 日）であった。当時の日本を振り返っておくと、1957 年 7 月 1 日に警察予備隊を自衛隊に改組した上で、1958 年度から 1960 年度までの 3 年計画として第一次防衛力整備計画(一次防)を策定し、アメリカから自衛隊が哨戒機をどのように購入し、軍備を増強していくかという問題と対峙していた。

ここで問題とする箇所が「サンデー毎日」に初出掲載されたのは、1974 年 11 月 17 日号から 1975 年 7 月 13 日号にかけてであるが、一次防を巡る商社間の攻防が史実を再現しつつ描写されている事実を突き止め、架空化されている人物や団体に特定のモデルが存在していた臭いが感じ取られる様子に鑑み、事実との照合を試みて、自衛隊の哨戒機受注に際し、金銭拝受や機密漏洩が行われていた様子を考察したい。

更には、作品連載中からその後にかけて、ロッキード事件（1976 年 2 月)、ダグラス・グラマン事件（1978 年 12 月）が世間の関心を奪ったが、『不毛地帯』にロッキードを彷彿させるラッキード、グラマンを彷彿させるグラントなる会社名が登場し、それらと総理までを含む政界や商社が利権を巡って激闘する様子に接すると、山崎が両事件をあたかも見通していたかのように映ったとしても決して不思議ではなかった状況にも言及を進める。

二、戦後 30 年という時空間

太平洋戦争時に作戦を練る立場だった壹岐は無条件降伏の決定に従おうとしない関東軍を説得するために直接伝令を行うべく新京に向かったが、帰国することなく関東軍と行動を共にし、ソ連との停戦交渉に臨む所から物語は始められる。そのままシベリア抑留の身

臺灣大學學術期刊資料庫

となり、最後の帰還船で舞鶴に戻ってくるまで 11 年の歳月を要したが、過酷だったシベリア体験は抑留体験者の紡ぎ出した言説を取り込みながら描かれている。1912（大正元）年 11 月 21 日生まれ（12-13）の壹岐は、終戦を関東軍に伝え、そのままソ連の支配下に置かれる状況を選んだ際には 32 歳、シベリア抑留を終え、ハバロフスク第一分所を出発する 1956（昭和 31）年 12 月 18 日（12-318）には 44 歳になっていた。「近畿商事へ出社する第一日目」（12-277）は 1959 年 2 月であり、46 歳だった。

すると、作品が発表され始めた 1973 年 8 月に壹岐は還暦を迎えている。彼と同世代の仲間は戦後社会を職業人として生き、引退する頃であった。戦争体験を引きずりながら、受けた教育も価値観も異なる戦後世代と渡り歩く社会人としての生活にも終わりが見えてきた時期である。そのような最中に戦争の記憶を復活させる終戦協定、旧満州国の放棄、さらにはシベリア抑留が生々しく描写されると、この作品が紡ぎ出す言説が自己の体験を代弁して語りかけてくれているかのように当時の高齢者には映っていたと解釈できる。また、彼らの子弟は団塊の世代であり、本作品が世に出た頃には社会人となり、家庭を築く時期に達していた。そのような戦後世代にとっては、本作品が親世代の混乱する価値観を表象しているように見えていたであろう。

太平洋戦争中に青春を生きた山崎には、戦争体験者が戦後社会をどのように生きたかという関心に、「政治的腐蝕がいつまでも許されるはずがない」[2]との信念も加わった結果、『不毛地帯』では軍事で世界制覇を画策した大本営作戦参謀が総合商社という新たな組織の中でどのように振る舞ったかを問うに至る。戦争にまつわる言説が雑誌連載を通して作者と読者を結びつけ、加えて戦後世代には自らより上の世代を突き動かしていた価値観を理解させるための装置と

[2] 山崎豊子「『不毛地帯』を書き終えて」、『サンデー毎日』第 57 巻第 38 号通巻 3143 号〔1978 年 9 月 3 日号〕、毎日新聞社、59 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

なった。この手法に手ごたえを見出した山崎は『二つの祖国』、『大地の子』と足かけ 18 年の歳月を費やして戦争三部作を完結させた。

三、社会状況との交錯

なぜ 1973 年から 1978 年にかけて、元軍人の抑留体験と帰国後における人生が主題となったのであろうか。当時の政治状況、国際関係を鑑みれば、ヒットするテーマが意図的に選択されていると言える。1969 年 7 月にアメリカはアポロ計画で人類を月面に送り込み、軍事力でソ連を凌駕する様子を世界に示した。宇宙開発における米ソ対立はアメリカ側に分があるように見えた一方、米ソ代理戦争の様相を濃く帯びたベトナム戦争では北ベトナムが勝利して社会主義国を樹立し、南側を支援したアメリカ軍は撤退を余儀なくされる。その頃、日本では大阪で万国博覧会が開催され、戦後高度経済成長の達成に社会が湧いた。そのような中、佐藤栄作内閣（在位：1964 年 12 月 1 日～1972 年 7 月 6 日）における外交の到達点を象徴する出来事として 1972 年 5 月 15 日の沖縄返還があり、戦後処理はひとつの節目を迎えた状況にあったのである。他方、もう一つのソ連側にまつわる問題として北方領土問題が存在したが、こちらについては進展がないままで、壹岐が体験したとされる抑留体験の描写は膠着状態を続ける日ソ関係の状況とオーバーラップした。

『不毛地帯』連載開始時は田中角栄内閣（在位：1972 年 7 月 6 日～1974 年 12 月 9 日）の最中にあったが、首相の中国訪問（1972 年 9 月 25 日～30 日）を通した日中国交正常化（9 月 29 日）を経て、1973 年 10 月 6 日に始まった第 4 次中東戦争の影響によるオイルショックの結果、高度経済成長が終焉を迎えた頃であった。その問題は本作品の後半部で近畿商事がイランでの石油開発を手掛けていく様子の描写により[3]、現実感を伴う形で再現される[4]。

[3] 注 2、531 頁。
[4] 「二十六章　インシャ・アッラー」（14-344）以降。

臺灣大學學術期刊資料庫

連載中にエネルギーを確保しなければ国家が立ち行かない現実に直面したことは、石油資源がなかったからこそ、日米開戦に踏み込まざるを得なかった戦時下の悪夢[5]を呼び覚ますのに十分だった。その様子は陸軍士官学校の後輩にあたる兵頭信一良が「日本も真剣に石油問題に取り組まなくてはならない、壹岐さん、日本が戦争に負けたのは石油がなかったからじゃありませんか」(14-332)とたたみかけるのに対し、「石油確保の重要性は、アメリカに駐在して肌身で感じている」(14-333)と壹岐が切り返すやり取りでよく言い当てられている。

四、作者とモデルの欲望

瀬島龍三が壹岐の大枠である事実は山崎の秘書を長く務めた野上孝子の述べる通りである[6]。陸軍幼年学校、陸軍士官学校を経て陸軍大学校を首席卒業し、「日本軍の統帥について」と題した御前講演[7]を行った秀才は、極東国際軍事裁判(東京裁判)時のソ連側証人としての出廷[8]とシベリア抑留で人生のどん底を目の当たりにしたが、帰国後は伊藤忠商事への入社を契機として復活を遂げる。作品には書かれることのない後日談ではあるが、瀬島は伊藤忠を退職後、最終的には中曽根康弘内閣(在位:1982 年 11 月 27 日～1987 年 11 月 6 日)のブレーンとして臨時行政調査会委員や臨時行政改革推進委員会委員となって、国政に関与する存在にのし上がっていく[9]。その

5 瀬島自身も「対日石油の供給を停止すれば、自動的に戦争になる」(瀬島龍三『大東亜戦争の実相』PHP 研究所、1975 年 1 月、178 頁)と分析した。
6 野上孝子『山崎豊子先生の素顔』文藝春秋、2015 年 8 月、91 頁。
7 東京新聞・戦後五十年取材班編『元大本営参謀の太平洋戦争　瀬島龍三インタビュー』東京新聞出版局、1995 年 5 月、33 頁。
8 フジテレビ番組スタッフ編、瀬島龍三著『新・平成日本のよふけスペシャル瀬島龍三　日本の証言』フジテレビ出版、2003 年 2 月、145-149 頁。なお、『二つの祖国』では瀬島龍三が東京裁判に出廷し、証言した事実が語られている。
9 その頃の瀬島の思想については、以下の書籍から窺い知ることができる。瀬島龍三・加藤寛『戦略なき国家に明日はない』日本政経文化社、1995 年 8 月。瀬島龍三『祖国再生　わが日本への提案』PHP 研究所、1997 年 2 月。

臺灣大學圖書館期刊資料庫

生きざまからは、日本という国家を動かす存在として振る舞いたいというやみがたい欲望こそが彼の人生を形作ったと解釈できる。

保坂正康は、「問題の航空機商戦でさえ、魅力的な壹岐正を主人公に、先に見たような現実とは異なった感動のストーリーとして描かれている。その壹岐が実は瀬島であるという噂によって、瀬島のプラスイメージが世間に定着しはじめていた。あとは、それを補完する過去の証言をくり返すだけでいい、という状況ができあがっていたのである」[10]と述べるが、瀬島は『不毛地帯』に描かれた魅力ある壹岐正像を軸に自己の物語を語れば英雄になれた。

しかしながら、実際の瀬島は、「富山県の旧制砺波（となみ）中学で同級生だった元郵政相片岡清一」が「自衛隊がだんだん大きくなって軍備を拡張していくということで伊藤忠商事が（防衛力商戦の戦力として）瀬島さんの獲得に熱心だった」[11]と述懐しているように伊藤忠商事にその軍歴をフル活用して哨戒機商戦に勝利させるキー・マンとして迎え入れられた節がある[12]。瀬島の伊藤忠入社は 1958 年 1 月であり、一時防のグラマン決定がロッキードに変更となったのは、翌 1959 年 11 月 6 日であった。入社の際に四等社員だった瀬島は、この後、航空機部次長・部長、業務部長・業務本部長、取締役・常務取締役・専務取締役と社内の地位を駆け上がるが、企業人として出世街道をひた走った過程で航空機部の責任者を歴任している訳であり、航空機受注をめぐる商社と政府、航空機製造会社との駆け引きをも制したのが事実なのである。よって、「伊藤忠の発展と同時に伊藤忠の仕事を通して、日本を復興させようとした。民間企業の

[10] 保坂正康『瀬島龍三　参謀の昭和史』文藝春秋、1978 年 12 月。引用は、文春文庫（1991 年 2 月）213 頁。
[11] 共同通信社社会部編『沈黙のファイル「瀬島龍三」とは何だったのか』共同通信社 1996 年 4 月。引用は、新潮文庫（1999 年 8 月、269 頁）による。
[12] 野地秩嘉も「伊藤忠としては瀬島の学歴、軍歴を利用したかったのではないか」と指摘する。野地秩嘉『伊藤忠　財閥系を超えた最強商人』ダイヤモンド社、2022 年 12 月、127 頁。

臺灣大學學術期刊論文

ビジネスパーソンではあったが、身をささげたのは日本という国だった」[13]と見なし得る訳である。

瀬島自身は長編となった自伝の中でも、「のちに、私が陸軍時代の人脈を生かして航空機商戦で活躍したように誤解した人もいたようだが、実際には何もタッチしていない。一介の嘱託の身であり、海千山千のビジネスマンたちと、丁々発止と渡り合えるような存在ではなかった」[14]としか述べないが、この態度は野上が瀬島は航空機商戦に関しては一切語らなかったとしている[15]態度に等しい。つまり、秘匿するしかない状況が瀬島の動きにあったのであり、回想録にさりげなく記されている言説をそのまま信じる訳にはいかないのである。この点に関して、鵜飼清は次のように語っている。

> 壹岐正が政界と防衛庁を巻き込んで戦闘機商戦に向かっていくのとは違って、瀬島龍三は表立った動きを見せていない。それは回想録『幾山河』にスッポリそこのところが抜けていることからもわかる。瀬島があえて記録から消してしまうほどの商戦であり、また戦後賠償ビジネスのことも『幾山河』に記されていないのは、それだからこそ戦後日本の生々しい政・官・財癒着の中で行なわれた敗戦後日本が浮かび上がってくるのだ[16]。

時間を FX 商戦の際に戻すと、日商岩井（現在の双日）に焦点を当て、瀬島のライバルである海部八郎の生涯を描いた仲俊二郎は「なにしろ瀬島龍三が FX 商戦で見せた辣腕ぶりには舌を巻く」[17]とした上で、状況を暴露する。

> 瀬島は対防衛庁の元空幕長上田康弘を自社の顧問に迎え、内局、制服組ともに押さえてみせた。一方、政治家についても、

---

[13] 注 12、186 頁。
[14] 瀬島龍三『瀬島龍三回想録　幾山河』産経新聞ニュースサービス、1995 年 9 月、300 頁。
[15] 注 6、111 頁。
[16] 鵜飼清『山崎豊子問題小説の研究　社会派「国民作家」の作られ方』社会評論社、2002 年 11 月、323 頁、326 頁。
[17] 仲俊二郎『我れ百倍働けど悔いなし　昭和を駆け抜けた伝説の商社マン海部八郎』栄光出版社、2011 年 3 月、135 頁。

臺灣大學圖書館期刊資料庫

自ら汗を流し、彼らの懐深くに食い込んだ。当時の首相岸信介を始め、佐藤栄作大蔵大臣、川島正次郎自民党幹事長らに強力な政治工作を行ったのである。児玉誉士夫や辻政信といったフィクサーたちとの交際についても述べるまでもない[18]。

このように実際の瀬島は綺麗事では済まない暗躍を引き受けていた。よって、仮にその事実を覆って余りある英雄が壹岐正として誕生するならば、彼にとっては願ってもない状況だった。

一方、山崎にとっても作品生成は自己を世に出すための手段であって、根底を貫く強烈な動機は瀬島と相通じた。『不毛地帯』第 10 回から第 12 回にかけてが自著[19]からの借用であると嗅ぎ付けたのは今井源治であった[20]。また、発表当時には特にスポットが当たらなかったものの、今井からの引用の前段に相当する第 2 回から第 6 回にかけて、壹岐が関東軍の支配下に入った後に停戦協定を行い、その後ソ連領に連れていかれ、「内務省ハバロフスク地方本部取調官、ヤゼフ少佐」（12-71）に取り調べを受ける箇所は秦彦三郎[21]、第 31 回で堀が自決する場面と第 32 回に描かれるハバロフスク事件は石田三郎[22]、東京裁判にソ連側証人として壹岐が出廷する場面、並びに資本主義幇助罪で強制労働 25 年の刑を受ける場面は松村知勝[23]の文献から今井の指摘と同様の形で引用がなされている[24]。以上から判断できるのは、戦争言説を記録文献から作品に取り込む物語生成

18 注 17 に同じ。
19 いまいげんじ『シベリヤの歌　一兵士の捕虜記』牧野出版社、1971 年 3 月。
20 発端は「朝日新聞」1973 年 10 月 21 日号に掲載の記事であった（栗原裕一郎『〈盗作〉の文学史　市場・メディア・著作権』新曜社、2008 年 6 月、207～215 頁）。なお、今井源治は後の著書でも、シベリア抑留の場面は自著からの無断引用であるという立場を崩していない（いまいげんじ『山崎豊子の『盗用事件』』三一書房、1979 年 8 月）。
21 秦彦三郎『苦難に堪えて』日刊労働通信社、1958 年 4 月。
22 石田三郎『無抵抗の抵抗　ハバロフスク事件の真相』日刊労働通信社、1958 年 3 月。
23 松村知勝「裁判と監獄」、徳永笹市編『裁判　監獄　防諜　ソ連囚人政策の裏面　戦犯、抑留者の体験したレポート』日刊労働通信社、1958 年 10 月。
24 徳永光展「引用改変の状況　山崎豊子『不毛地帯』におけるシベリア抑留者の描写」、『社会環境学』第 10 巻第 1 号、社会環境学会、2021 年 3 月、33-55 頁。

臺灣大學學術期刊資訊庫

方法の採用について、山崎が確信を持っていたという事実なのである[25]。

戦争体験者は、敗戦によって生じた心の痛みを癒し、戦後社会における価値観の転換を受容する必要性に迫られていたのであり、シベリア体験を彷彿させる描写方法は、経験の復習に一役買っている。また、団塊の世代以降に位置する戦後派にとっては、作品そのものが悲惨な事実の学習装置となり得た。

シベリア抑留から商社マンに転じ、貿易で世界と勝負する華々しい活躍の一方で、抑留体験者とのつながりも帰国者の集まりである朔風会の活動を通して欠かさない律儀な壹岐の姿は、戦争体験者が戦後を如何にして生きていくかという問題に対してひとつのロールモデルを示している。また、親世代が体験した凄惨な戦争とそこからの復活劇を団塊の世代以降であれば、自らの生き方の指針にすることもできた。つまり、瀬島も山崎も、このテクストの生成に関わることで戦争体験の保存に一役買っている。また、事実を彷彿させる断片の連なりが活字として登場すると、事実以外、すなわち創作の箇所までがあたかもリアリティを伴っているかのように見えたとしても不思議ではない。作者は、シベリアの場面の後、FX 戦へと舞台を変化させ、ロッキードを模したラッキードという単語を暗喩のように作中にちりばめ、不正の存在を暴くかの如き筆致にしたが、その結果、現実を作品が語っているかのように見られる状況が発生した。ロッキード言説は、作品評価の底上げに一役買ったのである。

五、負の隠蔽と正の描出

壹岐は前川文夫[26]や大澤真幸[27]が述べるように、作品内では英雄に仕上がっているが、その様子はとりもなおさず彼が持つ負の側面を切り捨てることで成り立っている。国益の追求という理想は、賄賂

[25] 次作『二つの祖国』で『極東国際軍事裁判速記録』（雄松堂書店、1969 年 1 月）から膨大な引用がある様子からも、作者の姿勢は明らかである。
[26] 注 1、126 頁。
[27] 大澤真幸『山崎豊子と〈男〉たち』新潮社、2017 年 5 月、127 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

の使用や機密文書の持ち出しという手段を使って手を汚す悪を伴わなければ成立しない様子は FX 戦でラッキードを売り込むために壹岐が取った行為から明らかである。けれども、作品では商社で活躍する元軍人が輝かしくクローズアップされ、軍隊での経験が戦後社会でも活かされるケースがある様子が焙り出されている。そうしていけば、「最初から軍人を志して、軍歴以外、何もない」（12-331）者、「幼年学校から国家のために死する精神を叩き込まれた者」（12-376）であっても、民主主義を標榜する戦後社会に生きる場所が存在するという希望を抱かせてくれる。「国が戦争放棄し、軍隊が否定され、生きる目的を喪失した」（12-376）とは兵頭の述懐であったが、この失意は戦争に総動員され、敗北を喫した戦中派の日本人に広く共感を抱かせる。そのような多くの国民を味方につけるための技法こそが、軍務以外無知なはずの軍人が戦後社会で経済戦という新たな闘いに身を投じていく姿の描出だった。

一方、隠蔽された負の側面とは何であったのだろうか。戦争の結果、壊れた人々、再起不能な幾多の人々の存在は闇に葬られているし、陸軍士官学校卒業生、言わば軍の幹部として振舞った者を免罪しているような形跡も認められる。

シベリア抑留下にあっても抑留者をソ連当局が管理するために当初は旧軍の階級秩序が維持された事実はよく知られている[28]。そのような状況にあって、シベリアで活字に飢えていた抑留者の欲望を引き寄せるかのようにして社会主義イデオロギーの正当性を宣伝することを目的とした「日本新聞」[29]が発刊され、日本人収容所に配布されていった（12-163）。その紙面は、ソ連邦体制や社会主義の資本主義に対する優越性を鼓舞する内容で占められたが[30]、極寒の異国で肉体労働に従事し、空腹や病と闘い、日々ただ帰国の日が到来す

[28] 阿部軍治『慟哭のシベリア抑留　抑留者たちの無念を想う』彩流社、2010 年 9 月、92 頁。
[29] 復刻版は以下で確認できる。朝日新聞社編『復刻　日本新聞Ⅰ』朝日新聞社、1991 年 2 月。朝日新聞社編『復刻　日本新聞Ⅱ』朝日新聞社、1991 年 3 月。朝日新聞社編『復刻　日本新聞Ⅲ』朝日新聞社、1991 年 5 月。
[30] 栗原俊雄『シベリア抑留　未完の悲劇』岩波書店、2000 年 9 月、79 頁。

臺灣大學日本語文學系

ることに望みをかけてシベリアでようやく生きながらえていた日本人を洗脳するのに格好の素材となり得たのである[31]。

しかしながら、壹岐はシベリア天皇の名を欲しいままにした浅原正基（ペンネーム・諸戸文夫）[32]をモデルにしたとみられる安田藤吉郎が「どの日本人収容所においても、入ソ当時の旧軍隊体制は打倒され、生活、作業すべての面で平等に、民主的に運営されている、そして今や旧日本人俘虜は、偉大なるソ同盟と同志スターリンの温かい配慮によって、働く喜びにひたっているのだ！」（12-163）と叫ぶ声にも耐え、ハバロフスク内務省で「予備判事のシャーノフ大尉」（12-219）の尋問にも屈さず、捕虜の絶食によって劣悪な待遇に対する抗議運動をハバロフスク事件[33]として起こしてでも戦い得た[34]。また、「インターナショナル」（12-165）を合唱し、「陸軍大佐、香川恒久」（12-166）を「リンチ」（12-168）し、「狂気のようなシベリア民主主義に順応している」（12-176）ことで帰国の順位を争う[35]かのような集団にも屈しなかった。

壹岐が勇ましく描かれれば、瀬島龍三を含む旧軍人は得をする。なぜならば、当時の世相において旧軍人が戦争犯罪人との烙印を押され、社会から白眼視される風潮も色濃く残存していたからである（12-16）。この雰囲気は、「壹岐にとって、大本営作戦参謀として、大東亜戦争に参画したことが、余人には到底、理解され得ぬ心の負い目になっている」（12-16）という記述からも明白である。山崎は戦争の痛手を深く自覚した人物像を読者の前に差し出すことで、罪の意識に支配され苦しめられる旧軍人に免罪符を与えているし、軍に命を捧げた関係者の心を浄化するのに効力を発揮している。また、

31 白井久也『検証　シベリア抑留』平凡社、2010年3月、120-124頁。
32 吉田幸平『シベリア捕虜の思想戦　日本人相剋の悲劇』中日新聞社、2008年5月、30頁。
33 木下秀明『抑留生活十一年　ソ連の実相』日刊工業新聞社、1957年9月、97-108頁。
34 これも瀬島の実体験に基づく。綱淵昭三『瀬島龍三の魅力　新装改訂版』ビジネス社、1995年11月、54-55頁。
35 富田武『シベリア抑留者たちの戦後　冷戦下の言論と運動1945-56年』人文書院、2013年12月、46頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

トラウマに支配されながら、「次の第二の人生だけは誤りたくない、いや絶対誤ってはならぬ」（12-17）と懺悔するように誓うことに代表されるように、美化した旧軍人＝戦争加害者である壹岐を前面に押し出し、戦争体験の労苦を舐めた人々を味方に付けた。結果として、日本社会に残存した戦争や職業軍人への憎しみを鎮静化させ、社会の安定化に寄与したと言える。

六、呼称の問題

航空機商戦をめぐる事件の進行を辿ってみると、作者は同時代読者に敢えて現実を想起させるような描き方をしている。なぜならば、登場する人物をはじめとする様々な呼称が徹底的に現実のものを似せて名付けられているからである。

ラッキード F104 は一文字違いでロッキード F104、グラント・スーパー・ドラゴン F11 も同様に一文字違いでグラマン F11 を彷彿させる。近畿商事は「関西」という立地を象徴したものだが、実際には伊藤忠商事であり、そのライバルである「首都圏」所在の東京商事は当時既に総合商社としての地位を確立していた日商岩井である。とすると、壹岐正のライバル、鮫島辰三の存在は瀬島龍三と海部八郎の対決を思い起こさせる[36]。しかしながら、瀬島龍三の本質は獲物を喰いちぎるまで追い求めるという設定の鮫島辰三にあり、小説内での壹岐正は飽くまでも美化されている。というのは、「鮫〈島〉辰〈三〉」と「瀬〈島〉龍〈三〉」とを並べると、明らかに鮫島は瀬島を意識して命名されていると言わざるを得ないからである。〈島〉と〈三〉の一致に加えて、鮫島の「辰」と瀬島の「龍」も呼応している。よって、鮫島辰三は海部八郎と瀬島龍三を足して割ったかのような存在として読めというメッセージが込められているのである。

幕僚長・原田勝が実際には源田実を指す様子は「源」の「さんずい」を取って作品中では「原」とされている。防衛庁長官・山城は

[36] 注 17 に同じ。

臺灣大學學術期刊資料庫

赤城宗徳から「城」の文字を取っている。巌総理は岸信介であるが、漢字の作りの一部が符合する。佐橋大蔵大臣は、当時の内閣を顧みるに佐藤栄作と考えられるが、「佐」の文字が佐藤を読者に彷彿させる。自由党総務会長・大川一郎は、自民党総務会長だった河野「一郎」、自「由」党とあるのは実際には自「民」党を指している。衆議院決算委員会委員長・田中彰治は、中田章次に変えられているが、これなど田中の二文字を入れ替えて「中田」とし、さらに「しょうじ」と発音される彰治を別の漢字・「章次」で記している。当時、海原治官房長は実際に海原天皇の異名を取っていたが[37]、作中では海原の海を「貝」に改めて「貝塚官房長」とし、やはり貝塚天皇（13-42）として崇め奉られる存在に仕立て上げている。また、迫水久常は「久」の文字を取って、「久」松経済企画庁長官として登場するが、彼が鈴木貫太郎内閣のもとで終戦工作の一翼を担った歴史的事実も作品中には書き込まれ、その時の内閣は「鈴」「貫」「郎」をそのまま、「木」を「本」に、「一」を「太」に変えて、「鈴本貫太郎」として登場させる。ハワイでぜんそくの治療をしたと衆議院決算委員会で弁明する川島正次郎は「川」を「三」に改めて「三島」幹事長とし、作品内でもやはりハワイでぜんそくの療養をしていた旨、記されているのである。

ここまで見てくれば、山崎が事実を暴いたかのように読者が作品を理解するよう誘導していく作戦を取って、執筆に臨んでいる状況が明らかとなる。

山崎は自民党幹事長・川島正次郎がハワイでぜんそくの治療をしていたと衆議院の決算委員会で答弁していたものの、実際にはアメリカ本土のロッキード社へ密航し、政治工作していたはずだと述べている[38]。川島がそのような答弁を行っているのは、第29回国会衆議院決算委員会議録第9号（閉会中審査）（1958年9月9日）の記

[37] 注11、278頁。
[38] 山崎豊子「題名変更」、『山崎豊子全作品第9巻月報』新潮社、1986年3月。引用は、『山崎豊子全集14　不毛地帯㈢』新潮社、2005年2月、547頁。

臺灣大學圖書館期刊資料庫

録によって明らかである。山崎もまさにこの記録に辿り着き、川島とグラマン社との結びつきを嗅ぎ取ると共に、苦し紛れの嘘をつかなければならなかった点に秘匿しなければならない不透明なやり取りがあったとの考察に行きついた。その後、山田長司は川島正次郎の行動に隠された闇が存在することを言い当てているが[39]、山崎もこの立場を支持した上で、三島幹事長を描いてみせる。だから、ぜんそく治療でハワイに行ったとみせかけてロサンゼルスでグラントからの政治献金があったはずだと川又に言わせる（12-529）設定の三島幹事長が第 55 回（1975 年 3 月 2 日号）に登場すると、驚きを禁じ得ない。

このようにしてみると、作者は現実の背後を抉り出し、実在した人物の行動や出来事を基にして、それらに関わった人々のドラマを創造したとみるべきであり、そのような手法によって『不毛地帯』の価値を高めようとしていたのである。現実世界で進行するドラマと作品世界が近似すれば、既知の事件との関連性、類似点と相違点を受け取る側が考えたくなる事実を作者は計算していたのである。

七、FX 商戦と『不毛地帯』での描かれ方

作中のモデルとみられる一次防決定後の FX 商戦とは、1958 年から 1959 年の自衛隊航空機受注に際して、政界・防衛庁・商社・航空機メーカーが繰り広げたやり取りを指し示すものである。その状況については、沢木耕太郎がこの商戦と『不毛地帯』との関係につき、「『不毛地帯』ではラッキード、グラントとなっているが、実はロッキード、グラマンの空中戦とよばれ、内閣、防衛庁はもとより巨大商社のほとんどが空中戦、いや札束合戦の渦のなかにあった」[40]と述べている通りであった。

---

[39] 「第 33 回国会衆議院決算委員会議録第 5 号」1959 年 11 月 18 日、3-4 頁。

[40] 沢木耕太郎「断念の果ての夢」、『波』第 12 巻第 10 号（通巻第 105 号）新潮社、1978 年 9 月。引用は、『山崎豊子全集 15 不毛地帯㈣』新潮社、2005 年 3 月、546 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

実際には伊藤忠の推すグラマンF11が第一物産（三井物産系）のロッキードF104Cよりも優勢で、発注機は一旦グラマンF11に決定した[41]。伊藤忠が川島正次郎自民党幹事長や河野一郎ら自民党の人脈に食い込んだ結果、グラマン（伊藤忠）になったと噂されていたのである。しかしながら、その後、ロッキードは代理店を第一物産から丸紅飯田に変更の上で反撃に出る。その結果、グラマン決定は白紙になり、その後ロッキードF104Cが逆転勝利する。つまり、伊藤忠は負けたのである[42]。

続いて、二次防決定（1961年7月18日）後の1963年には、バッジ・システムにおいて、伊藤忠商事の推すヒューズ社、三井物産の推すGE社、日商岩井の推すリットン社の三組が争うが[43]、今度は海原治を味方につけた伊藤忠商事＝ヒューズ社が勝利する[44]。

第二次FXでは、日商岩井が推すマグダネル・ダグラス（旧ダグラス社）のF4ファントムが受注に勝利し、伊藤忠が推していたノースロップ社F5は敗れてしまう。伊藤忠の敗北は岸信介元首相と海部八郎のラインが動いた結果、頼みとしていた海原治が排除されてしまい、後ろ盾を失ったことが災いした[45]。その後、伊藤忠は1968（昭和43）年に東京地検によって家宅捜索されている[46]。また、1968年3月2日に川崎健吉一等空佐が「伊藤忠商事が代理店を務めるヒューズ社の極東駐在員に防衛力整備計画などの資料を渡した疑い」[47]で逮捕され、その三日後に山口二三空将補が謎の死亡を遂げている[48]。

---

41 注10、176-177頁。
42 注41に同じ。
43 注10、181頁。
44 注11、276-277頁。
45 注11、279頁。
46 注10、178-179頁。
47 注11、281頁。
48 注47に同じ。

臺灣大學學術期刊資料庫

それでは、これら一連の動きは『不毛地帯』ではどのように描かれているか。執筆の時間はシベリアでの話の残り部分が連載され終わった 1974 年 11 月以降である。近畿商事は里井の言葉を待つまでもなくラッキード F104 を支持している（13-26）。一方、グラント・スーパー・ドラゴン F11（試作機 2 機のみ）は「グラント―輸入代理店の東京商事（鮫島辰三の暗闘）―五菱（ごりょう）重工―総理派がつるんだグラント金脈」（13-28）によって一旦勝利した。けれども、「壹岐は、政界工作、ライバル社の極秘文書の入手、大蔵省への工作等々の複雑なかけひきを使って、「スーパードラゴン F11 内定」を白紙還元にし、さらに、「ラッキード社 F104 確定」へと持っていくことに成功した」[49]のである。つまり、壹岐の暗躍で近畿商事は東京商事に逆転勝利したという設定であり、その後、近畿商事に家宅捜索が入り（13-186～187）、壹岐の親友だった川又伊佐雄の轢死事件が発生する（13-210）。

以上を比較してみると、1958 年から 1959 年頃に起こったグラマンとロッキードの駆け引きを根底に据えながら、実際には 1958 年から 1968 年までに起きた出来事（一次防決定に基づく FX 商戦）を織り交ぜる形で描いている様子が浮き彫りになってくる。1959 年頃の出来事をフィクション化しながら、そこに 1968 年に起きた事件を 1959 年の出来事として再設定している訳である。

「十七章　新生」（連載では第 75 回、1975 年 7 月 20 日号）以降、作品内の時間は 7 年飛び、1967 年の春に壹岐が常務取締役に昇格するところから描かれ始める。翻ってみるならば、戦闘機受注を巡る商戦とは、一次防決定に伴う 1960（昭和 35）年までの出来事だった。なお、瀬島龍三が伊藤忠商事で常務取締役に昇格したのは二次防に関わるバッジ・システムに伊藤忠が推していたヒューズ社の採用が決定した後の 1963 年 11 月であった[50]。

[49] 注 1、125 頁。
[50] 注 10、179 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

伊藤忠（近畿商事）と日商岩井（東京商事）は『不毛地帯』では逆転し、その上で創作が混ぜ込まれている。ロッキード（ラッキード）とグラマン（グラント）と言えば、丸紅と伊藤忠の戦いであるが、伊藤忠をモデルとする近畿商事がラッキードを担いでいるように反転させ、グラントは日商岩井をモデルとする東京商事が担いでいるように設定する。その上で、壹岐正と鮫島辰三の戦いをラッキードとグラントという二項対立に落とし込んでいる。

現実には、1976 年 2 月にロッキード事件、1978 年 12 月にダグラス・グラマン事件が発覚した。『不毛地帯』連載中に、ロッキード社、全編完結後にグラマン社が相次いで日本の政府高官に商社を経由して不正資金を渡していた事実が明るみに出たため、作品の先見性が話題となった[51]。ロッキード事件は全日空の航空機購入を巡る疑惑であり、一次防の FX をロッキード F104 に決定した経緯に生じた事件とは無関係である。また、ダグラス・グラマン事件は、日商岩井の政界工作により海部八郎らの逮捕に至った事件だが、これも一次防の FX 問題とは異なっている。しかしながら、明らかにロッキードを揶揄するラッキード、グラマンを揶揄するグラントがちりばめられていること、さらには一次防の FX 決定が二転した記憶も生々しい時世にあって、強い臨場感を伴ったように『不毛地帯』は紡ぎ出された形跡が認められる。このようにみてくると、過去の物語に現在の事件を重ね合わせ、さらにモデルを入れ替えるなどの操作が施されている様子は明らかである。

八、物語の暗示者

元陸軍大学校の指導教官にして、義父である板野郷之には、陸軍大学校時代に秀才との誉高かった壹岐の姿が脳裏に焼き付いていたために、「お国のために尽す政治を志す気持はないのか」（12-458）とつぶやき、さらに娘には「私は、正君ほどの人物が、商社マンと

[51] 注 6、112 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

して終ってしまうことが惜しいのだよ」(12-498)と本心を吐露して、その才能を国家人として生きることに費やしてほしいと願わずにはいられない。その板野は壹岐が軍歴を近畿商事に利用されることになるのではないかという危惧を娘である佳子に以下のように伝えている。

> 原田勝を団長とした防衛庁のミッションが今、アメリカへ行っているらしい、そのメンバーに空幕防衛部長の川又君も入っており、帰りにロスアンゼルスに待機中の航空自衛隊のパイロットと合流し、米空軍基地で、次期戦闘機の候補機のテスト飛行をするらしい、正君の旅程表をみると、正君もちょうどその頃ロスアンゼルスへ着くことになっているので、どうも気になるんだ（12-498）

唐突に持ち出された壹岐のアメリカ出張が大門社長の「鞄を持って随いて来たらええだけのことや」(12-399) といった見せかけの暢気さとは裏腹に「考えがあって」(12-401) の行為である事実は、その後壹岐が当地で旧友・川又による戦闘機のテストフライトに引き合わされて「アメリカ出張の意味が、やっと明確に捉えられ」(12-523)、帰国後に里井の要望通り東京の航空機部に配置換えになった展開から明らかである。壹岐の実力を熟知していた板野は、壹岐の境遇を予言する存在として作品に登場し、その後における筋書きは板野の危惧が見事に的中した様子を読者に強く印象付ける。壹岐は結局、ロスアンゼルスで FX の機種選定のために候補機に乗っていた川又と戦後初めて 18 年ぶりに遭遇することになるが（12-518)、川又が政治家の利権が錯綜している状況の中、それでも見て見ぬふりをして襟を正す姿勢を持たないのかという言葉、「貴様は、FX 問題には絶対、かかわりたくないと云っているようだが、こういう腐れ切った裏面を知っても、なおかつ、君子危うきに近寄らずで、厭だと云い張るのか」(12-530) と迫られ、心を揺り動かされる結果となるのである。

臺灣大學學術期刊資料庫

板野は後の展開に勘付く予言者としての役割を果たしているが、その意味では毎朝新聞政治部記者・田原秀雄（13-34）もやはり後の状況を洞察する力を持った存在として登場する。彼は壹岐がアメリカで原田調査団と出会っている事実に近畿商事が FX 戦に勝利するシナリオを読むと同時に、川又が自説を強固に主張するため、政治家筋では煙たがられているという情報も握っている。川又には「西部航空方面隊司令官の司令官」（13-87）へ配置換えが申し渡され、さらに追い打ちをかけるように「市谷の補給統制処付に転出を命じられた」（13-196）結果となり、それを屈辱としか解釈できない状況へと追い詰められるしかなかったのであるが、この川又の変化に関する限り、田原は正確に予言者としての立ち位置を担っている。結局、川又は貨物列車に飛び込んで轢死するが、この悲劇への警笛を田原は鳴らしていたと解釈できるのである。

『不毛地帯』全巻を通読した上で、板野や田原の言説を跡付けると、彼らが後の物語を象徴的に暗示する台詞を発していることに気付くのであるが、この作品は週刊誌連載が初出の形態であった。売れ続けるためには、作品に様々な仕掛けを準備する必要があるのは間違いない。本作の場合、後の展開が想像され、読者が謎解きをするかのようにして読書行為に耽り、毎週雑誌を心待ちにするような行動様式に持っていくための使者が板野や田原の存在だと言い得るであろう。

九、国益の追求

近畿商事社長・大門一三の考え方によれば、「根本において軍と商社は同じ」（12-18）であり、大局を読む能力が指揮官には必要だとする。大門は軍司令官・壹岐の辿った履歴と自己を重ね合わせ、シベリアでの過酷な体験を経ていることにも興味を示す。壹岐は国益という問題を起点に行動する姿勢を貫いて大本営やシベリアでの日々を送ってきたが、総合商社という想定外の職場が世界で取引を展開している様子を知るに及び、少年の頃から抱いていた国益の追

臺灣大學學術期刊資料庫

求がひょっとしたら商社という新しく巡り合わせた場で追求できる可能性も存在するのではないかという予感を抱くようになる（12-536）。

シベリア時代には生き続けることそのものに意味があるという信念が壹岐にとってのみならず、ひとえに抑留者にとっての心の支えであった。「シベリアに眠っている遺骨が帰って来るまでは真の帰還はないとして、遺骨の帰還促進と遺族の援助、会員の相互扶助を目的にした「朔風会」を結成し、手弁当で働いている谷川大佐」（13-78）はシベリア帰還者の壹岐に「シベリアであえなく死んで行った者の分まで、生きなくてはいけない―」（13-80）と諭すが、この言葉は壹岐に染みわたるのであり、FX 戦の最中にあっても国益を常に意識しながら襟を正して行動し続けなければならないという意識を呼び覚ます。壹岐がシベリア抑留帰還者の集まりである朔風会にかかわり続けるのはそこが彼にとっての精神的拠りどころだからに他ならない。「シベリア十一年間の長期抑留者の四分の一が、正常な家庭を失っていた事実」（12-382）に代表されるように、恵まれない引揚者と自らを対比させた時、恵まれ過ぎている自己の境遇が自覚されてくる。最終的に近畿商事を退職した後には朔風会の代表を引き受け、恋仲となった秋津紀武中将の娘・千里を残してハバロフスクへ旅立つが（15-521）、作品に通底するシベリア抑留者としてのトラウマとの対峙というテーマが前景化してくるのである。

シベリアにこそ送られなかったが、軍と商社、さらには陸軍士官学校での教育をも経験した存在として登場するのが兵頭である。近畿商事での出会いの場面、「壹岐さんのような大きな視野に立って、物を見、考える人が入社して下さったことは、われわれにとって大きな支えです」（12-378）と述べたことに始まり、「僕は、壹岐さんが航空機部でされている仕事がどういうものか、新聞や雑誌を通して想像するだけで、実際のところは到底、窺い知ることはできないですが、基本的な理念さえ間違っていなければ、気にされることはないじゃありませんか」（13-111）と言って「不同義、不道徳なこと

臺灣大學學術期刊資料庫

もやらねばならんのだ」（同）と応答する壹岐の理解者であり続けるのである。

十、おわりに

以上、『不毛地帯』が現実に起こった事件、並びに人々の動きに取材し、それらの大枠を借用して作り上げられた物語である事実を検証してきた。山崎は現実の一部を改変する形で、壹岐正像を造型し、英雄として描いた。そのことは、「戦闘機の機種選定に関しても、当初は国防という大きな観点からそれなりの信念を持っていた。ところが現実には、巨大な黒い渦に呑みこまれ、四十五年間抱いていた“信念”が、もの凄い速さで変貌を遂げてゆくんです」[52]と作者自身が語っている様子からも窺える。けれども、大きな観点に変貌を読むならば、英雄像を全うするに際する葛藤、換言すれば、汚れ役をも引き受けざるを得ない人生の解釈にこそ、読みの幅が存在することが分かってくる。作品には、変貌への想像力を喚起させられるような仕掛けがあり、受け取る側から見れば、自己の代弁者として、また憧れの英雄として、或いは戦争言説の教科書として作品に接し得る構造が認められる。さらには戦後処理問題が沖縄返還を通してクローズアップされた時期に連載が継続していった状況は、ソ連の匂いを強烈に宿した壹岐をはじめとするシベリア抑留帰還者に関する描写を通して、頑なソ連の姿勢を強調することにも貢献した。また、米ソという両大国の狭間に不安定な形で立脚することでしか戦後処理問題に向き合えない日本の危うい立ち位置[53]を本作品は見据えていたとも受け取れるのである。

---

[52] 山崎豊子「戦後の日本人の歴史」、『波』第10巻第8号（通巻第79号）1976年8月。引用は、山崎豊子『山崎豊子　自作を語る［作品論］　作家の使命　私の戦後』新潮社、2012年1月、226頁。

[53] 危うさは、冷戦後も改訂されない日米地位協定に象徴的な形で表れていよう。詳細は以下に詳しい。本間浩『在日米軍地位協定』日本評論社、1996年7月。琉球新報社編『外務省機密文書　日米地位協定の考え方　増補版』高文研2004年12月。山本章子『日米地位協定　在日米軍と「同盟」の70年』中央公論新社、2019年5月。前泊博盛・猿田佐世監修、新外交イニシアティブ編『世界のなかの日米地位協定』田畑書店　2023年3月。

臺灣大學日本語文學系

川島正次郎がハワイでぜんそくの治療に従事したという国会答弁は虚偽であり、山崎が嗅ぎつけたようにロスアンゼルスで政治工作に従事していたと見るべきであろう。ただし、山崎はこれを「衆議院決算委員会議事録」[54]を丹念に読み解いた結果だとしているが[55]、1974（昭和 49）年 6 月のロッキード社訪問時に関係者から航空機商戦の内幕を聞き得た可能性もあり[56]、そうであればこそ、川島の虚偽を三島幹事長の動きとして作品に書き得たとも解釈できる。一方、瀬島龍三は FX 商戦については口を閉ざしていたが、秘匿しなければ生きていけない事情があった。『不毛地帯』はその舞台裏をも暴露していよう。

こうして、作者、マスコミ、瀬島龍三、政治家らの言説すべてを批判的に読む必要性を確認すると共に、山崎が FX 商戦で見通した状況につき、『不毛地帯』と関連資料に言及しつつ考察した。その上で、山崎が現実を暴き出し、そこに創作をない交ぜにして作品を構築した事実を突き止めた。

最後に、隠蔽されかねなかった現実を敢えてフィクション化した様子が分かる言説に書き換える作業を通して、FX 戦にまつわる政界の暗部を広く社会に暴露した作品の意義を改めて確認しておきたい。

【付記】本文の引用は、『山崎豊子全集 12　不毛地帯㈠』（新潮社 2004 年 12 月）、『山崎豊子全集 13　不毛地帯㈡』（新潮社　2005 年 1 月）『山崎豊子全集 14　不毛地帯㈢』（新潮社　2005 年 2 月）、『山崎豊子全集 15　不毛地帯㈣』（新潮社　2005 年 3 月）によった。引

54 「第 29 回国会衆議院決算委員会議録第 9 号（閉会中審査）」（1958 年 9 月 9 日）、「第 33 回国会衆議院決算委員会議録第 5 号」（1959 年 11 月 18 日）。

55 山崎豊子『山崎豊子　自作を語る 3　小説ほど面白いものはない』新潮社、2009 年 12 月、172 頁。

56 注 6、110-111 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

用の末尾に記した（○○-●●）の○○は巻数、●●は頁数を示している。

なお、本稿は日本学術振興会・科学研究費補助金、基盤研究 C 課題番号 22K00356（2022-2025 年度）「山崎豊子・戦争への表象をめぐって」の成果報告である。

【参考文献】

朝日新聞社編（1991）『復刻　日本新聞I』朝日新聞社。
Asahishinbunsha ed (1991), *Fukkoku nihonshinbunI*, *Asahishinbunsha*.

朝日新聞社編（1991）『復刻　日本新聞II』朝日新聞社。
Asahishinbunsha ed (1991), *Fukkoku nihonshinbunII*, *Asahishinbunsha*.

朝日新聞社編（1991）『復刻　日本新聞III』朝日新聞社。
Asahishinbunsha ed(1991), *Fukkoku nihonshinbunIII*, *Asahishinbunsha*.

阿部軍治（2010）『慟哭のシベリア抑留　抑留者たちの無念を想う』彩流社。Abe Gunji(2010), *Doukoku no shiberiayokuryuu: yokuryuusha tachi no munen wo omou*, *Sairyuusha*.

石田三郎（1958）『無抵抗の抵抗　ハバロフスク事件の真相』日刊労働通信社。Ishida Saburou (1958), *Muteikou no teikou: habarofusuku jiken no shinsou*, *Nikkanroudou-tsuushinsha*.

いまいげんじ（1971）『シベリヤの歌　一兵士の捕虜記』牧野出版社。Imai Genji (1971), *Shiberia no uta:ichi heishi no furyoki*, *Makinoshuppansha*.

いまいげんじ（1979）『山崎豊子の『盗用事件』』三一書房。Imai Genji (1979), *Yamasaki Toyoko no “Touyoujiken”*, *San’ichisyobou*.

鵜飼清（2002）『山崎豊子問題小説の研究　社会派「国民作家」の作られ方』社会評論社。Ugai Kiyoshi(2002), *Yamasaki Toyoko*

臺灣大學學術期刊資料庫

mondai shousetsu no kenkyuu.shakaiha “kokuminsakka” no tsukurarekata, *Shakaihyouronsha*.

大澤真幸（2017）『山崎豊子と〈男〉たち』新潮社。Oosawa Masachi(2017), *Yamasaki Toyoko to “Otoko”tachi*, *Shinchousha*.

木下秀明（1957）『抑留生活十一年　ソ連の実相』日刊工業新聞社。Kinoshita Hideaki (1957), *Yokuryuu seikatsu 11 nen: soren no jissou*. *Nikkankougyoushinbunsha*.

栗原俊雄（2000）『シベリア抑留　未完の悲劇』岩波書店。Kurihara Toshio(2000), *Shiberia yokuryuu:mikan no higeki*, *Iwanamishoten*.

栗原裕一郎（2008）『〈盗作〉の文学史　市場・メディア・著作権』新曜社。Kurihara Yuuichirou (2008), *“Tousaku” no bungakushi: shijyou・media・chosakuken*, *Shinyousha*.

国会衆議院決算委員会編（1958）「第 29 回国会衆議院決算委員会議録第 9 号（閉会中審査）」（1958 年 9 月 9 日）。Kokkai shuugiin kessan iinkai ed (1958), *Dai 29 kai kokkai shuugiin kessan iinkaigiroku, No.9（Heikaicyuu-shinsa）*(1958 nen 9 gatsu 9 ka).

国会衆議院決算委員会編（1959）「第 33 回国会衆議院決算委員会議録第 5 号」（1959 年 11 月 18 日）。Kokkai shuugiin kessan iinkai ed (1959), *Dai 33 kai kokkai shuugiin kessan iinkaigiroku, No.5* (1959 nen 11 gatsu 18 nichi).

共同通信社社会部編（1996）『沈黙のファイル「瀬島龍三」とは何だったのか』共同通信社。Kyoudoutsuushinshashakai- bu ed (1996), *Chinmoku no fairu: “Sejima Ryuuzou” towa nandattanoka*, *Kyoudoutsuushinsha*.

極東国際軍事裁判所編（1969）『極東国際軍事裁判速記録』雄松堂書店。Kyokutou kokusai gunji saibansho ed.(1969), *Kyokutou kokusai gunji saiban sokki roku*, *Yuushoudou-shoten*.

臺灣大學學術期刊資料庫

沢木耕太郎（1978）「断念の果ての夢」、『波』第 12 巻第 10 号（通巻第 105 号）新潮社。Sawaki Koutarou (1978), Dannen no hate no yume. *Nami* 12-10(105), *Shinchosha*.

白井久也（2010）『検証　シベリア抑留』平凡社。Shirai Hisaya(2010), *Kenshou:shiberia yokuryuu*, *Heibonsha*.

瀬島龍三（1975）『大東亜戦争の実相』PHP 研究所。Sejima Ryuuzou (1975) , *Daitoua Sensou no Jissou*, PHP kenkyuusho.

瀬島龍三（1995）『瀬島龍三回想録　幾山河』産経新聞ニュースサービス。Sejima Ryuuzou (1995), *Sejima Ryuuzoukaisouroku; ikusanga*, *Sankeishinbun-nyuususaabisu*.

瀬島龍三（1997）『祖国再生 わが日本への提案』PHP 研究所。Sejima Ryuuzou (1997), *Sokoku saisei: waga nihon eno teian*, *PHP Kenkyuusho*.

瀬島龍三・加藤寛（1995）『戦略なき国家に明日はない』日本政経文化社。Sejima Ryuuzou, Katou Hiroshi (1995), Senryaku naki kokka ni asu wa nai, *Nihonseikeibunkasha*.

綱淵昭三（1995）『瀬島龍三の魅力　新装改訂版』ビジネス社。Tsunabuchi Shouzou (1995), *Sejima Ryuuzou no miryoku: Shinsou-kaiteiban*, *Bijinesusha*.

東京新聞・戦後五十年取材班編（1995）『元大本営参謀の太平洋戦争　瀬島龍三インタビュー』東京新聞出版局。Toukyoushinbun sengo 50 nen syuzai han ed(1995), *Moto daihonei sanbou no taiheiyousensou: Sejima Ryuuzou intabyuu*, *Toukyoushinbunshuppannkyoku*.

徳永光展（2021）「引用改変の状況　山崎豊子『不毛地帯』におけるシベリア抑留者の描写」、『社会環境学』第 10 巻第 1 号　社会環境学会。Tokunaga Mitsuhiro (2021), Inyou kaihen no jyoukyou: Yamasaki Toyoko “Fumouchitai” ni okeru shiberia yokuryuusha no byousha, *Shakaikankyou-gaku*.10-1 Shakaikankyougakkai.

臺灣大學學術期刊資料庫

富田武（2013）『シベリア抑留者たちの戦後　冷戦下の言論と運動 1945-56 年』人文書院。Tomita Takeshi (2013), *Shiberia yokuryuusha tachi no sengo: reisen ka no genron to undou 1945-56 nen*, *Jinbunshoin*.

仲俊二郎（2011）『我れ百倍働けど悔いなし　昭和を駆け抜けた伝説の商社マン海部八郎』栄光出版社。Naka Shun-jirou (2011), *Ware 100 bai hatarakedo kui nashi: shouwa wo kakenuketa densetsu no shoushaman Kaifu Hachirou*, *Eikoushuppansha*.

野上孝子（2015）『山崎豊子先生の素顔』文藝春秋。Nogami Takako (2015), *Yamasaki Toyoko sensei no sugao*, *Bungei-shunjyuu*.

野地秩嘉（2022）『伊藤忠　財閥系を超えた最強商人』ダイヤモンド社。Noji Tsuneyoshi (2022), *Itouchuu: zaibatsukei wo koeta saikyousyounin*, *Daiyamondosha*.

秦彦三郎（1958）『苦難に堪えて』日刊労働通信社。Hata Hikosaburou (1958), *Kunan ni taete*, *Nikkanroudoutsuushin-sha*.

フジテレビ番組スタッフ編、瀬島龍三著（2003）『新・平成日本のよふけスペシャル　瀬島龍三　日本の証言』フジテレビ出版。Fujiterebi bangumisutaffu ed, Sejima Ryu-uzou (2003), *Shin-heisei nihon no yofuke supesharu: Sejima Ryuuzou: nihon no shougen*, *Fujiterebishuppan*.

保坂正康（1978）『瀬島龍三　参謀の昭和史』文藝春秋。Hosaka Masayasu (1978), *Sejima Ryuuzou: sanbou no shouwa shi*, *Bungeishunjyuu*.

本間浩（1996）『在日米軍地位協定』日本評論社。Honma Hiroshi(1996), *Zainichi Beigun chii kyoutei*, *Nihonhyouron-sha*.

前川文夫（2005）『山崎豊子への誘い』白地社。Maekawa Fumio (2005), *Yamasaki Toyoko eno izanai*, *Hakujisha*.

前泊博盛・猿田佐世監修、新外交イニシアティブ編（2023）『世界のなかの日米地位協定』田畑書店。Shin gaikou Initiative ed,

臺灣大學學術期刊資料庫

(2023), *Sekai no nakano nichibei chii kyoutei* supervised by Maedomari Hiromori and Saruta Sayo, *Tabata-shoten*.

松村知勝（1958）「裁判と監獄」、徳永笹市編『裁判　監獄　防諜ソ連囚人政策の裏面　戦犯、抑留者の体験したレポート』日刊労働通信社。Matsumura Tomokatsu(1958), Saiban to kangoku.Tokunaga Sasaichi ed, *Saiban: kangoku: bouchou: soren syuujin seisaku no rimen:senpan yokuryuu-sha no taiken shita repouto*, *Nikkanroudoutsuushinsha*.

山崎豊子（1976）「戦後の日本人の歴史」、『波』第 10 巻第 8 号（通巻第 79 号）新潮社。Yamasaki Toyoko (1976), Sengo no nihonjin no rekishi, *Nami* 10-8(79), *Shinchousha*.

山崎豊子（1978）「『不毛地帯』を書き終えて」、『サンデー毎日』第 57 巻第 38 号（通巻 3143 号）〔1978 年 9 月 3 日号〕毎日新聞社。Yamasaki Toyoko (1978), “Fumouchitai” wo kakioete, *Sandee Mainichi* 57-38 (3143), *Mainichishinbunsha*.

山崎豊子（1986）「題名変更」、『山崎豊子全作品第 9 巻月報』新潮社。Yamasaki Toyoko (1986), Daimei henkou, *Yamasaki Toyoko Zensakuhin 9 Geppou*, *Shinchousha*.

山崎豊子（2009）『山崎豊子　自作を語る 3　小説ほど面白いものはない』新潮社。Yamasaki Toyoko (2009), *Yamasaki Toyoko: jisaku wo kataru 3:shousetsu hodo omoshiroi Mono wa nai*, *Shinchousha*.

山崎豊子（2012）『山崎豊子　自作を語る［作品論］　作家の使命私の戦後』新潮社。Yamasaki, Toyoko (2012), *Yamasaki Toyoko: jisaku wo kataru: sakuhinron: sakka no shimei: watashi no sengo*, *Shinchosha*.

山本章子（2019）『日米地位協定　在日米軍と「同盟」の 70 年』中央公論新社。Yamamoto Akiko(2019), *Nichibei chii kyoutei: zainichi beigun to “doumei” no 70 nen*, *Chuuoukouronshinsha*.

臺灣大學學術期刊資料庫

吉田幸平（2008）『シベリア捕虜の思想戦　日本人相剋の悲劇』中日新聞社。Yoshida Kouhei (2008), *Shiberia horyo no shisousen: nihonjinsoukoku no higeki*, *Cyuunichishinbun-sha*.

琉球新報社編（2004）『外務省機密文書　日米地位協定の考え方　増補版』高文研。Ryuukyuushinpousha ed.(2004), *Gaimushou kimitsubunsho: Nichibei chii kyoutei no kangaekata: zouho-ban*, *Koubunken*.

臺灣大學學術期刊資料庫